

記者の目



百武 信幸
石巻通信員

東日本大震災の津波で児童74人と教職員10人が犠牲となった宮城県石巻市立大川小を巡り、児童親人の遺族が起こした訴訟は、仙台高裁が4月26日、当時の校長らと市教委の事前防災の不備を認め、市と親に1億円の賠償を命じた。市と親は「校長らに専門家を求めたのは無理があり、学校現場にあまりに過大な義務を課す」と上告した。結論は最高裁に持ち越されるが、高裁判決は、全国の教育現場に事前防災の重要性を初めて法的義務として突きつけた画期的なものだ。

私は震災直後、東京から被災地へ入り、同小で子どもを捜す保護者と偶然出会って以降取材を続けている。仙台高裁で審理が始まったのは4年の暮から仙台支局、その後「石巻通信員」の記者として、1審と控訴審の弁論はすべて傍聴した。一審では地震発生後の津波の予測性が争われたが、控訴審は遺族から地を異にした。小山浩裁判長が「事前の防災に絞って審理したい」との方針を示したのだ。4月26日開示の判決記事で

「大川小訴訟判決が伝えるもの」

は、高裁の創設直後裁判官が「昨年10月の証人尋問で、石巻市教委の元学校教習部長を問いただす場面を紹介した。その尋問ではもう一つ、印象的なのがあった」。

「せめて教訓に」 無念へ思いはせ

遺族の疑問に向き合い、戦後慰問と言われる学校事故から「教訓」を導こうとする裁判官の寛容を感じた。

建築裁判官は、大川小の危機管理マニュアルに災害時の児童の引き渡し方法が書かれていないことを疑問に思わなかったのかと尋ね、元校長が「振り回ればきちんと明記すべきだった」と答えると、「震災前にもあるべきことだったのではないかと強い口調でたずねた。続けて、ハザードマップで学区の一部が浸水予想地を修正・指導する義務を意図的に含まれる点を指摘し、『津波と無関係な学校ではあ

りませんよね』とたまたま昨年10月の証人尋問で、石巻市教委の元学校教習部長を問いただす場面を紹介した。その尋問ではもう一つ、印象的なのがあった。遺族の疑問に向き合い、戦後慰問と言われる学校事故から「教訓」を導こうとする裁判官の寛容を感じた。



現場を視察する（手前左から）仙台高裁の朝原道之裁判官と小山浩裁判長。遺族の説明を受け、旧大川小から高台の位置を確認した一石巻市で昨年10月4日、百武信幸撮影

定されたのは誤りで、校長らは独自の立場から批判的検討が求められたとして、市教委と学校の「組織的過失」を認めた。認定の根幹に遺族が集めた証言や市などから引き出した事実があり、判決はその努力の結果でもあった。遺族にとって全面勝訴に近い内容だったが、判決後、遺族は安堵しつつも笑顔はほとんど見せなかった。訴訟に加わった19遺族の中でも、他の兄弟姉妹は無事だったり、震災後に新たな命を授かったりした家族もいれば、我が子をすべて失い、今も行方不明の手を握す親もあり、裁判に込める思いは「様ではない」。

原旨市長の今野浩行さん(56)が強調してきた言葉がある。「我が子は教訓のために生まれたわけじゃない。どんな形であれ生きていてほしいか。かなわぬなら、せめて教訓として未来の命を守ってほしい」。8年目となった震災は「教訓」の文脈ばかりで語られるが、その根幹には「せめて」という遺族の無念があることを忘れてはならない。そこで思いを凝めてこまめ、我が事として教訓を受け止められるのではないかと。記者として、遺族の志しみを繰り返して伝える意味は防災の土壌を築くためだと肝に銘じている。

高裁判決言い渡しの後、法廷で、大川小8年だった次女を亡くした佐藤敏郎さん(54)が顔を手で覆い、背中を震わせていた姿が忘れられない。当時公立中教師だった佐藤さん

は悩み抜いた末、「裁判とは別の道であの目を問いつけた」と断言し加わらなかつた。深い理由を尋ねると、「二つの思いが交錯したという。一つは裁判を闘って来た今野市長の姿にこみ上げた感謝。もう一つは「やっ」と、先生は子どもの命に責任を持つ誇り高い職業だと誇ってくれた」との感謝だったという。

佐藤さんは命がけで児童を守ろうとしたはずの先生たちの無念にも思いを巡らせ「責任追及が先に立ち、懲罰決定をためらう状況を作った組織の問題」に原因があると断言してきた。現場を知る教員とそれを指摘する市教委に防災への備えを求めた判決に、「教員たちは誇りを持って、これからは『学校は命を守る』ことが第一だ」と走り出す「サイレン」にしてほしい」と話す。

知識と経験の 積み重ね大切

判決が教育現場に求めたのは専門知識ではなく、保護者や住民との目と心の関係から得られる知識や経験を、学校が積み重ねていくことだ。市も県も「事前防災の重要性」は認めている。ならば遺族や住民と一体となり、悲劇が再び教訓を改めて検証することにより、学校防災を全国に発信すべきではないか。高裁判決が、教訓を未来につなげるスタートラインとなることを願う。